



●公益社団法人 日本山岳会 福岡支部

福岡支部報

【目次】

日本山岳会のミッションについて
令和6年度支部活動報告
槍・穂高連峰の山小屋

P1
P2
P3~P7

2024年に読んだ山の本
チベット娘・ヤンツォと一枚の写真
支部活動報告と計画、編集後記

P8~P11
P12~P15
P16

日本山岳会のミッションについて

福岡支部事務局・支部長代行 No.9826 渡部秀樹

日本山岳会は今年 2025 年 10 月で創立 120 周年を迎えます。『山』新年号において橋本しをり日本山岳会会長は「年頭所感■創立 120 周年を迎えるに当たって」を寄稿され、あるべき姿は「みんなの日本山岳会」とし、理念づくりとその理念の明文化の必要性を説明されました。

- スローガン「みんなの日本山岳会」
- ビジョン「すべての人に山の楽しさを」
- 3本のミッション
 - ①会員による充実したクラブライフを
 - ②挑戦的で創造的な登山の実践と支援
 - ③山を通して人々の心を豊かに

このように明文化することで私たちが進むべき方向性と目指すべき山頂を明確に示されました。

日本山岳会の理念を地域から思考することも支部活動の一環であるとするれば、これは支部活動においても共通の指針であり、課題となるのではと思いましたが、あえてここでも引用してみました。では、3本のミッションについてあらためて支部活動に当てはめて考えてみます。

「①会員による充実したクラブライフ」を支部で支えるのは、支部山行であったり、懇親の場であったり、支部報による活動、言論発表であったりすると思います。全国広域組織の日本山岳会において、支部の活動

は地域ならではの身近な接点としての役割が重要だと考えます。

「②挑戦的で創造的な登山の実践と支援」については、福岡支部ならではの伝統的な考え方があります。かつて福岡支部の構成員はそれぞれ活発な地域山岳会などに所属する方が多く、日常山行は各山岳会でやるべきことで、福岡支部では挑戦的で創造的な登山に特化すべきだという考えが先輩方にありました。それに基づき海外遠征隊、海外調査団等の大きな目標を掲げて実践してきました。国内においては、近年の「日本の古道を歩く」は 120 周年記念事業のひとつとして全国の支部で取り組んだ事業ですが、創造的な登山の実践であるといえるでしょう。福岡支部は、令和 3 年秋に宝満山より英彦山への「峯入り古道・春の道」を 6 回に分けて実施し、一般参加者を含め、延べ人数約 145 名で歩きました。そして令和 4 年には「国境の山岳信仰・脊振山系の峯入り廻峰道を歩く」企画し全長 77km を 5 回に分け一般参加者を含め、延べ人数約 145 名で歩きました。

「③山を通して人々の心を豊かに」は、山を介して地域とのつながりを深めるようなイベントなどを主宰することなどで、取り組んで行けるのではないのでしょうか。

今、会員の高齢化と減少傾向にある中、これらのミッションを念頭に置き、少しずつ具体化し支部活動を一歩ずつ進めていくことも一案ではないかと思いましたので、あえてここにまとめてみました。

令和6年度支部活動報告

No. 14309 松原 稔

支部山行実施報告

「低山と居酒屋」シリーズというテーマで支部山行を実施しています。登山の後に温泉や居酒屋での一杯？を楽しみました。

(1) 2024 年 11 月 4 日

場所 飯盛山～高地～高祖山～鐘撞山 縦走

参加者 4 名 L 松原、副島、柴田、安永

快晴快適な秋の準ロング山行

(2) 2024 年 12 月 21 日

場所 二丈岳忘年山行

参加者 9 名

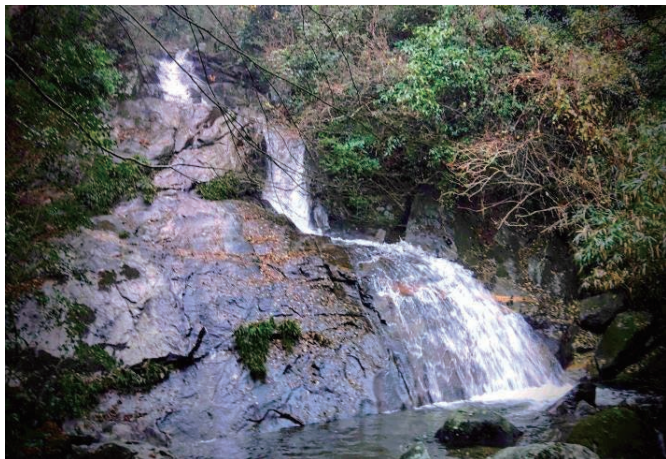
L 松原、倉智、副島、渡部、柴田、山井、加藤、長岡、安永

終始雨の中、濡れて寒かった山行

忘年会は“二丈温泉きららの湯”



二丈岳にて



明神の滝

(3) 2025 年 1 月 18 日

場所 十坊山新年山行

参加者 9 名

L 松原、副島、渡部、柴田、山井、加藤、中村(正)

長岡、安永

すっきりしない天気、でも頂上で日差しも、新年会は“きららの湯”



十坊山にて

(4) 2025 年 2 月 2 日

場所 王丸山 (糸島王丸～王丸山～糸島末永)

参加者 11 名

L 松原、副島、渡部、柴田、酒匂、淀川、長岡、安永、飯田、中村(寛)、原(義)

あまりあるく人もいない山、終始我々だけの静かな山行。



王丸山にて

あと 3 月に“糸島低山 蒙古山～妙見山縦走”が計画されています。

槍・穂高連峰の山小屋

No. 15240 柴田佳久

若い頃は春夏秋冬、四季を問わずテント山行が当たり前で、山小屋近くの指定地にテントを張ることも多かった。40代後半から、少しお金に余裕ができ、荷物の軽量化による体力温存と時間短縮のために、徐々に山小屋に泊まる機会が増えてきた。槍・穂高連峰周辺の大部分の山小屋は4月下旬から11月初めまで営業されており、冬山以外は利用することができる。シーズン最盛期には一つの布団に3人とか、朝はトイレ前に長蛇の列ができるとか、あるいは食事はあまり美味しくないとか、様々なことが言われてきたが、最近は山小屋もきれいになり、食事も随分と美味しくなった。また、コロナ禍を経て、事前予約制となって人数も制限されるようになり、より快適になったとの話も聞えてくる。

今回、上高地～槍ヶ岳～穂高連峰～新穂高のルート沿いにある山小屋に宿泊した時のことを思い出し、過去の山行を辿ってみたい。

◆観光客で賑わう上高地～明神

現在、上高地はインバウンドの影響もあって多くの人が訪れ、登山者よりも観光客の方が目立つ。ハイクラスのホテルが立ち並ぶ上高地の中で、河童橋から少し下った梓川右岸側にある上高地西糸屋山荘は、昭和3年から宿泊施設として営業を始め、古くから登山者が利用してきた山荘である。山荘というより旅館に近い雰囲気、2～3回泊ったことがある。

上高地の小梨平のキャンプ場を抜けて梓川左岸側の広い道を歩き、1時間弱で明神館に着く。一息入れるために立ち寄ることも多いが、泊ったことはない。なお、上部の山小屋が混雑する時期には、穴場になる宿である。梓川右岸側にある明神池の入口には、嘉門次小屋が建っている。世界に日本アルプスを紹介したウォルター・ウェストンをガイドした上条嘉門次が明治13年に建てた小屋が前身となっている。古い時代の雰囲気のある小さな山小屋で、一度は泊ってみたいと思っている。時間があるときは、囲炉裏で焼いたイワナの塩焼き、イワナの骨酒、燻製チーズなどに舌鼓を打っている。



写真-1 上高地西糸屋山荘

◆森林に囲まれた徳沢

明神から梓川左岸側を遡ること約1時間で徳沢に至る。施設が整った広いキャンプ場があり、何度かテントを張ったことがある。ここには、徳沢ロッジと徳澤園がある。

松本市が所有する徳沢ロッジは、登山道から少し奥に入った所にあり、樹林に囲まれた静かなロッジである。平成28年に館内が大幅にリニューアルされているが、改装前の安曇村が経営していた時期に泊まったことがあり、落ち着いた雰囲気のロッジであった。

徳澤園は、井上靖の小説「氷壁」のモデルとなった石原国利氏（令和5年1月逝去）に縁のある宿で、「氷壁の宿」とも呼ばれている。館内には前穂高岳をバックに若かりし頃の石原国利氏が井上靖氏と歓談している写真が飾られていた。ヨーロッパ風のクラシカルな建物で、館内には花も飾られ、明るい雰囲気の宿である。部屋は、洋室、和室、相部屋の3タイプがあり、何回もリニューアルされている。相部屋には3つのタイプがあり、ハチの巣みたいな造りで人気のある部屋もある。洋室はステンドグラスやウィリアムモリス生地のインテリアで飾られ、高級感が漂っている。ホームページには令和6年に新たに4部屋のさらに高級な個室のことが掲載されている。しかし、徳澤園の一番のおすすめは、品の良い器に盛られた美味しい夕食の品々で、特にメインの信州牛のステーキとワインにより至福の時を過ごすことができる。



写真-2 氷壁の宿 徳澤園



写真-4 横尾山荘



写真-3 徳澤園 洋室

◆槍・穂高の分岐点、横尾

徳沢からさらに梓川沿いに遡り、前穂高岳北尾根を眺めながら1時間超で横尾に着く。横尾からは、槍ヶ岳、涸沢、蝶ヶ岳の3方向に向かって登山道があり、ここから本格的な登りが始まる。横尾山荘の直ぐ前にテント場があり、テント泊と山荘泊のどちらも経験がある。平成20年に改築された山荘は、大部分が2段ベッドの相部屋（一部屋8名）となっているが、カーテンで仕切られ、プライバシーも確保されている。お風呂があり、汗を洗い流すこともできる（石鹸類は使用禁止）。なお、弁当（朝食の変更も含めて）はパンのセットで、少し物足りなかった記憶がある。また、利用したことはないが、山荘が閉鎖されている冬季は避難小屋が開設されている。

◆槍沢にある中継基地となる山小屋

横尾から槍ヶ岳方面に向かって梓川の左岸沿いの登山道を歩き、約1時間30分で槍ヶ岳山荘グループの山小屋、槍沢ロッジに着く。ロッジから登ること約30分でテント場のババ平（前身の槍沢小屋があった場所）に至る。一度だけロッジに泊まったことがあり、2階の大部屋に布団を並べて寝た。ババ平では雪の上にテントを張ったこともある。

ババ平から約4時間、槍沢の長い登りで槍の肩に着く。ゴールデンウィークには延々と雪の上を歩き、なかなか近づかない槍の穂先を見ながら、ひたすらステップを刻むことになる。

槍の肩から約20分下った所に中房温泉が経営する大正11年に開設された殺生ヒュッテが建っている。殺生ヒュッテは、東鎌尾根に喜作新道を開拓した小林喜作によって建てられた山小屋（その前は猟師小屋）である。名前の由来は、その昔、猟師がクマやカモシカなどの動物を追いつめて仕留めるのに適した平地があり、「殺生平」と呼ばれていたためと言われている。殺生ヒュッテには一度だけ泊ったことがある。平成18年のゴールデンウィークに槍ヶ岳から笠ヶ岳に登る計画で、一人テントを担いで上高地から入山したが、折からの雪とラッセルのために時間切れとなって、殺生ヒュッテに駆け込んだ。宿泊客もおらず、薄暗い大広間に一人で布団に潜り込んだ記憶がある。その後、双六小屋まで行き、笠ヶ岳を諦めて新穂高温泉に下山した。

東鎌尾根の稜線には、燕山荘グループの山小屋、ヒュッテ大槍が見える。槍ヶ岳と北鎌尾根、大天井岳～常念岳～蝶ヶ岳の稜線が一望できる場所にある。ヒュッテ大槍も一度だけ泊ったことがある。食事が美味し

いとの評判の山小屋で、夕食時のグラスワインのサービスとともに満足したのを覚えている。



写真-5 槍の穂先と殺生ヒュッテの屋根（右側）

◆北アルプス南部で最大規模の槍ヶ岳山荘

槍ヶ岳の南、山頂直下の肩（標高3,080m）にある槍ヶ岳山荘は、大正15年に槍ヶ岳肩の小屋として開設された。北アルプス南部では最大規模の山小屋で、収容人数は通常400名（コロナ禍前は650名とされていた）で、個室と大部屋がある。テント場は小屋の南側にあるが、幕営数は39張と限られており、シーズン中の遅い時間に到着した時にはテントを張る場所が確保できず、殺生ヒュッテのテント場まで下るか、山荘に泊まるかを選択しなければならない。槍ヶ岳山荘には数回泊ったことがある。おすすめは生ビール（当時1,000円）と焼きたてパン。また奥まった場所にある自炊部屋（比較的人は少ない）から槍の穂先を昇り降りする登山者を見ながら飲む焼酎のお湯割り（芋焼酎は担ぎ上げる必要がある）も格別である。冬は冬季小屋として一部が開放されている。



写真-6 槍ヶ岳山荘の全容

◆大キレットを挟む2つの山小屋

槍ヶ岳山荘から大喰岳・中岳・南岳を越えて快適な稜線歩きを約2時間30分、槍ヶ岳山荘グループの山小屋、南岳小屋に着く。ここから大キレットの始まりで、大キレットを挟んで北穂岳小屋が見える。南岳小屋のテント場で幕営したことはあるが、山小屋に泊まったことはない。

この先、垂直の梯子を下って大キレットの底に向かう。慎重に歩くこと約3時間30分、飛騨泣きを越えて最後の急崖を登ると目の前に北穂高小屋が現れる。日本で一番高いところ（標高3,106m）にある山小屋で、小屋の横の石段を上ると北穂高岳頂上である。テント場は涸沢側に約10分下った場所にあり、テントから顔を出すと正面に前穂高岳と北尾根が迫ってくる。山小屋にはゴールデンウィークに一度だけ泊ったことがある。小さな山小屋で、1階で食事、2階の相部屋で寝る。食事中にクラシック音楽が流れている心地よい山小屋である。



写真-7 南岳小屋と北穂高岳

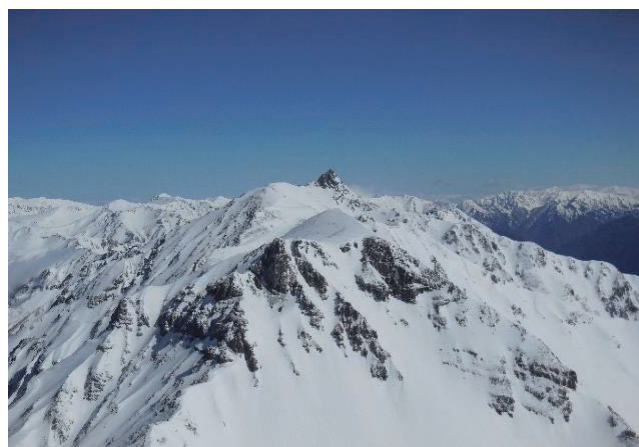


写真-8 北穂高小屋から槍ヶ岳を望む

◆登山の要所、穂高岳山荘

右手に滝谷の岩場、左下に涸沢を見ながらの岩稜歩き、約2時間30分で穂高岳山荘に着く。白出のコルにある穂高岳山荘は、令和5年に創立100周年を迎え、古くから穂高連峰の登山・縦走の拠点となっていた。300人を収容できる大きな山小屋で、基本的には相部屋で、追加料金で個室も利用することができる。春、夏、秋と何度も泊ったことがあり、冬は冬季小屋として一部が開放されている。山荘前のテラスから奥穂高岳への梯子を昇り降りする登山者を眺めながら飲む缶ビールを楽しみとした。穂高岳山荘で思い出すのは、平成30年に南伊豆での不慮の事故で亡くなられた元支配人の宮田八郎氏のことである。宮田氏は山小屋の業務だけでなく、多くの登山者を救った遭難救助に尽力し、穂高の厳しさと美しさをブログ、写真、映像で発信していた方で、NHKドキュメンタリー「穂高を愛した男 宮田八郎 命の映像記録」も放送された。



写真-9 穂高岳山荘と奥穂高岳

◆涸沢の2つの山小屋

涸沢カールには、涸沢ヒュッテと涸沢小屋がある。小屋から北穂高岳まで約3時間、奥穂高岳まで約3時間30分と日帰り登山ができる場所にある。両小屋の間にあるテント場に幕営したことがあり、どちらの小屋にも泊ったことがある。個人的には山小屋としての雰囲気が残る涸沢小屋が好みだが、涸沢ヒュッテの人气が高いようである。おでんを突きながらの生ビールと涸沢カールを取り囲む山々のパノラマは捨てがたい。紅葉シーズンには山小屋もテント場も人が溢れている。平成25年の秋に西穂高岳から奥穂高岳を縦走した時、穂高岳山荘が混雑していたので仕方なく涸沢まで下ったが、両小屋とも満員で、結局横尾山荘まで下山したことがあった。



写真-11 涸沢ヒュッテと奥穂高岳



写真-10 奥穂高岳からのシャンダルム



写真-12 晩秋の涸沢小屋

◆通年営業の西穂山荘

穂高岳山荘から約50分で奥穂高岳山頂に着く。ここで登山道が2手に分かれ、左側は吊尾根～前穂高岳～岳沢、右手はジャンダルム～西穂高岳に続く登山道である。

奥穂高岳から左側に進むと、約2時間の快適な稜線歩きで紀美子平に至り、ここから片道約30分で前穂高岳を往復する。紀美子平から急峻な重太郎新道を約2時間かけて下り、岳沢小屋に着く。以前は岳沢ヒュッテと呼ばれていたが、平成18年初めに雪崩で全壊、同年4月にヒュッテオーナーが事故で亡くなり、閉鎖されていた。その後、槍ヶ岳山荘グループが再建に乗り出し、平成22年に岳沢小屋として開設された。ヒュッテに泊まったことはないが、平成6年のゴールデンウィークにテント泊をしたことがある。1日目は西穂沢をつめて西穂高岳に登ったが、翌日から悪天につきまじり2日間テント内でごろ寝、話し相手もいないので時々ヒュッテに行ってお暇をつぶしていた記憶がある。3日目に天気が回復し、奥明神沢から前穂高岳に登り、吊尾根、奥穂高岳を経て、涸沢にテントを張った思い出がある。

奥穂高岳から右手に進むと、ジャンダルムが近づいてくる。馬の背、逆層スラブなど、次々と現れる岩場を慎重に進み、約5時間で西穂高岳に着く。振り返ると、時間がかかった割には近くに奥穂高岳が見える。約1時間30分で西穂独標、ここから安心できる道が続く、約1時間で西穂山荘に着く。西穂山荘は北アルプス南部で唯一通年営業している山荘である。テント泊、山荘泊、どちらも経験がある。ここでのおすすめは西穂ラーメン、冬場の冷えた身体によい。西穂山荘には本館と別館があり、約250人収容でき、基本的には相部屋となっている。平成2年に火事で焼失、その後再建されており、きれいな山小屋の印象が残っている。

西穂山荘から小屋の裏手の道を約1時間で新穂高ロープウェイの西穂高口駅まで、テント場横から約2時間30分で上高地まで下ることができる。直進すると焼岳に至り、途中で松本市が所有する焼岳小屋がある。小さな山小屋で、ランプの灯りが心地よく、一度泊ったことがある。



写真-13 西穂高岳からの奥穂高岳



写真-14 西穂山荘のキャンプ場

会社勤めの短い休日の中では、交通の便が良い槍・穂高連峰に行く機会が多く、宿泊可能な場所には、テント泊あるいは山小屋利用で全ての場所に泊っている。ただし、全てコロナ禍前の山行であり、曖昧な記憶に基づく内容も含まれており、大幅に変わった山小屋もあるかもしれない。時間に余裕ができれば、快適になった山小屋に再訪するとともに、登山速度は遅くなると思うが、テントを担いだ山行も復活させたいと考えている。

2024年に読んだ山の本

No. 14309 松原 稔

2024年に読んだ山の本と題して、以下6冊の山の本の紹介と自分なりに感じた事、そこから自分の山登りとどう繋がっているのか、書評という事ではなく個人読後感として読んだ順に書いていきたいと思います。

「おかえり」と言えるその日まで
中村富士美 著 (新潮社)



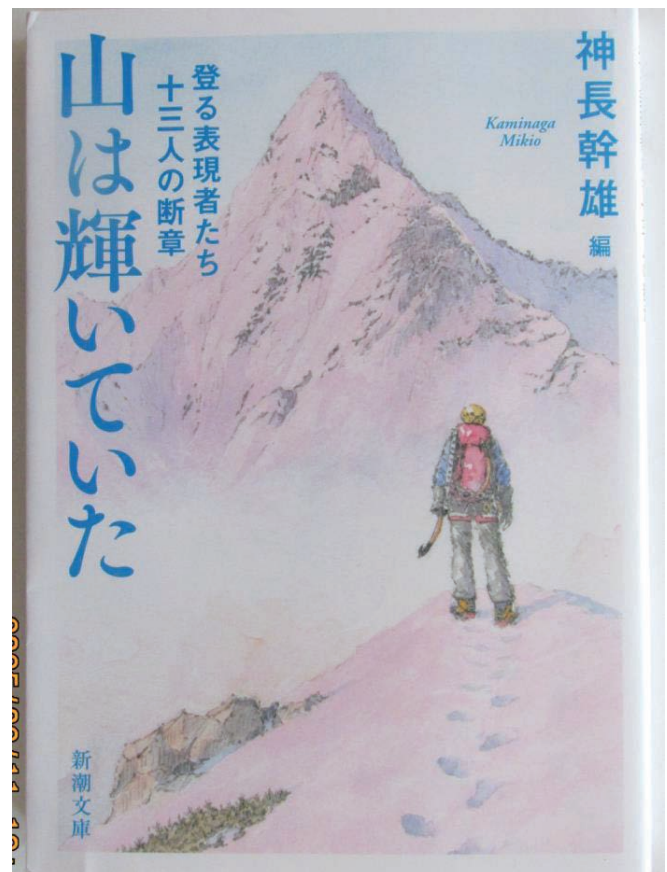
著者は“救命救急センター”の看護師で地元（東京都）の一般登山道での遭難という現実への疑問から、自身捜索団体「Liss」を組織し、遭難者の立場からではなく捜索する側から描いた6つのエピソードをまとめた本。

正直私はいわゆる遭難の緊迫感あふれドラマチックでさえあるドキュメントを期待して読んだのだが、その点からは山岳読み本としては期待外れ。でも「えっ！たったそれだけのことで」と思ってしまう程、本当に小さなきっかけから遭難は起きる・・・という事実。この頃その辺りの山には嘗めた態度で入る私には

重い示唆となった。頁数も155頁、字も大きく空白もたっぷり、当然アッという間に読み上げた本だが、山岳保険の補償範囲を超えたら、「もう捜索は打ち切って欲しい・・・」と書き残すべきと記す。これは今後山へ行くときの遺言として残さねばならないかもしれない。最も実際に残された家族にそうできるかどうかは疑問だが。最後、この本の表紙絵は魅力。

山は輝いていた

神長幹雄 編 (新潮文庫)



この本は福岡支部会員である「中島正一さん」より、ご子息の「中島正宏さん」一冬の八ヶ岳横岳大同心を単独登攀中に墜死 — の遺稿が再編集され出版されたので・・・と、支部長代行「渡部さん」経由でもらった本。

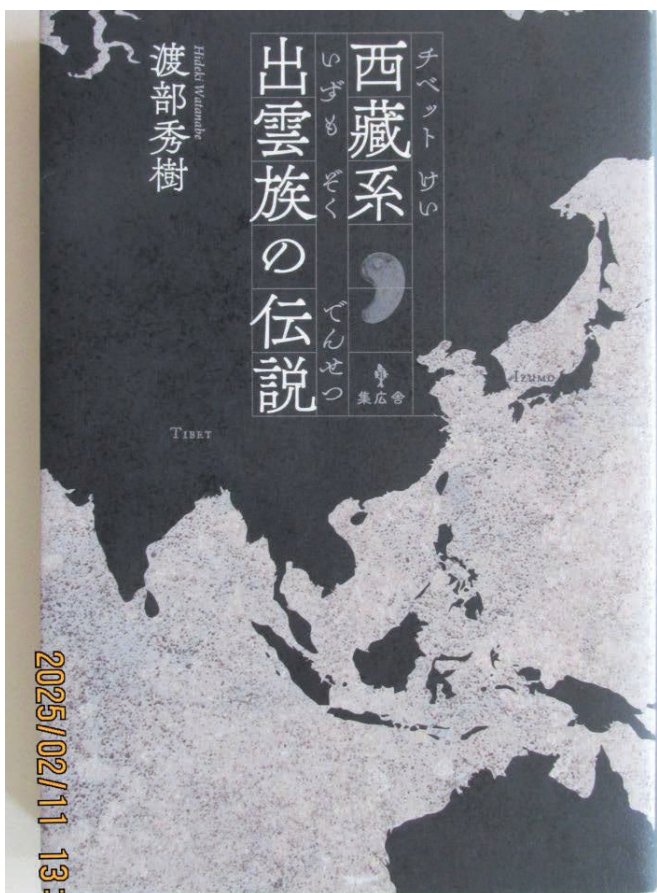
この本の案内は日経の書評欄でも知っていたが、それぞれ纏められている人のほとんどが、私にはまったく興味ない人達だったので関心もなかったのだが、もらった以上読まなければと読んだもの。案の定、冒頭の「田中澄江から立松和平・田淵行雄」とちょっと読むのに苦労したが、読み進めるうちに次第に山の厳しさが増す構成に引き込まれ、第4章「小西正継」第5章（最終章）の「山野井泰史」に至っては読んでいて興奮、改めて彼を描写した「凍（沢木耕太郎）・垂直

の記憶（山野井自身）」を読み返してみたいくなる。

そして冒頭の「中島正宏さん」については最終章の中の一編、遺稿と題して4年間の自身が書き溜めた言葉を抜粋して編集したものだが、これはもう哲学、正直難解で私にはよく消化できなかった。ただソロに拘った彼の登攀スタイルは、私には遠く及ばない世界だが、若い時には気持ちの上で確かにあったもの。それだけで久々に若き日を思いださせてくれた本。

西藏系出雲族の伝説

渡部秀樹 著 （集広舎）



この本の著者は我が JAC 福岡支部の支部長代行「渡部さん」その人。著者の多芸多才ぶりは羨望以外の何物でもないが、この本に関する限り山の本の範疇に入れるべきかどうか悩んだのですが、チベットは辺境、奥出雲も日本の辺境（失礼）、山屋は概して辺境に憧れ、そう考えれば山の本として書いてもよいのではないかとここに書くことにしたもの。

チベットについては私も行ったこともあって興味あり、一気に読んだのですが出雲については、「渡部家」の歴史が中心。であっても、「記紀や出雲風土記」に対する考察がなければ書けないだろうことも多く、氏の子供のころの記憶まで記しているのはすごいと思う。

漠然とした記述の部分もあるが、チベットのことを改めて知り — チベット仏教にも産土神・氏神様がいて、神仏習合文化として日本と共通すること等 — 出雲の歴史から私は、「古事記」に興味を持ち、今ゆっくり時間をかけてこの地を回りたいと考えている。著者は「故郷とは自分の軸を形成するものであり、今チベット人は国を失ったけれど、心の軸だけは失いたくない・・・と言う覚悟が見える」と最後に書いている。でも今のチベットの若い人たちにも本当にこの感覚は残っているのだろうか・・・という一抹の不安が私にはある。

版元ドットコム【紹介】より

西藏系出雲族の伝説

渡部秀樹 著

四六判 218 ページ 並製

価格 1,818 円+税

出雲族の血を継ぐ登山家はチベットとの運命の縁起の伝説に辿り着く。出雲神話マニアもチベットフリークも知らなかった新事実がいま明かされる。

チベットと出雲での長年のフィールドワークは、それぞれ別々の記録のはずであったが、不思議に繋がりはじめ、意外な展開を見せた。チベット探検の中でチベット民族に何となく明治の出雲人の面影を感じた私は、故郷を離れた自分が出雲族としての伝承をゆっくりと絶やしつつある最後の世代かもしれないと気付くことになった。そして出雲族の口伝や祖父の遺品を調べるうち、明治期と現在の出雲とチベットが縦と横の糸を紡ぐかのように広がりを持って繋がっていく。そしてついに前代未聞の運命の結末に辿り着く。

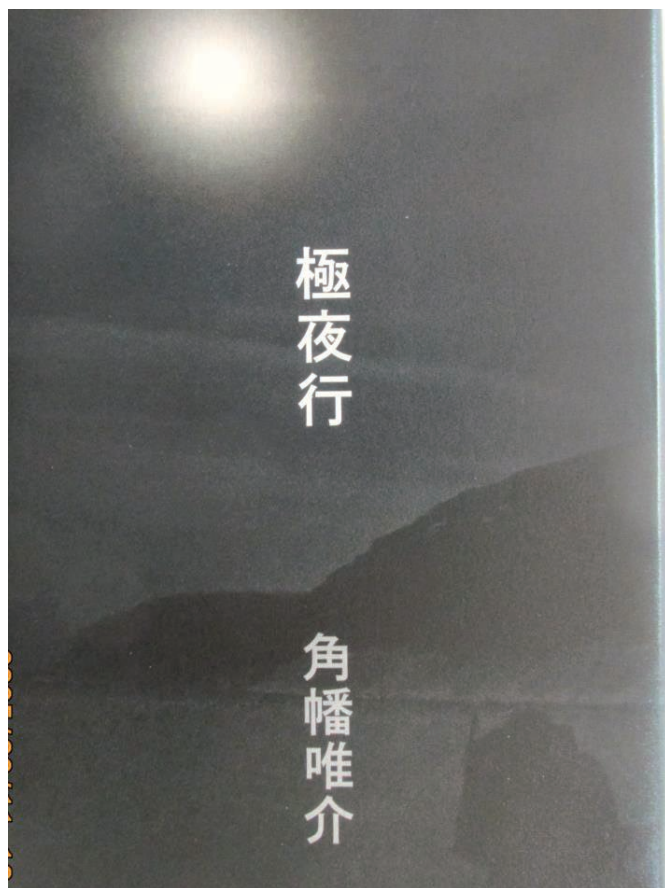
極夜行

角幡唯介 著（文春文庫）

2024 年に読んだ山の本の中では最大の収穫。極夜というのは、太陽が地平線から全く姿を見せない漆黒の夜の事。極地ではその状態が半年続く。この本を読む気になったのは、モンベルの機関誌“OUTWARD”で著者と「辰野勇」の対談を読んで。実際に手に取ってみると、その圧倒的な内容に、文庫だけれど「こんな厚い本読めるだろうか・・・」と思いながら、たまたま“十二指腸潰瘍”で入院することになり一気に読み上げたもの。

まず感じたのは、あの極限の旅でこれだけ詳細に自分の行動・思念を書き残せるものだろうか、正直一部フィクションを加えているのではないかと・・・思っ

たほど。例えば「白熊対策・橇引きの力、それ以上に極寒の闇の中で孤独感を癒してくれる精神的パートナーである犬を、いよいよ食べるものがなくなり、この犬も後一週間くらいで死ねだろう、そうしたらその肉・内臓すべてを食えて俺は生き延びれる」・・・と書く、そこまで追い詰められた旅、鬼気迫る冒険紀行。記録だけでなく感情の起伏やあふれてくる思考まで、自分の内面をもそのまま書き連ねた分厚に思索させる本。また「自分で地図とコンパスで確認して位置を確かめることは大きな創造的喜びだ。ところがGPSを使えば確かに確実安全だが、今の世間は便利で安全であることが最大の価値であり、このような面白みや歓びを失ってしまっている」とも書く。この思いは、目標の山頂に着くとその先に自分の知らない山が見えて、次はその山に登ってみたいくなる・・・、そんな私自身いつも感じる気持ちと共通するのではないかな・・・とかつてに納得してしまう。とにかく欺瞞なしの本性が剥き出しになっていく視点に引き込まれた一冊。



バリ山行

松永 K 三蔵 著 (講談社)

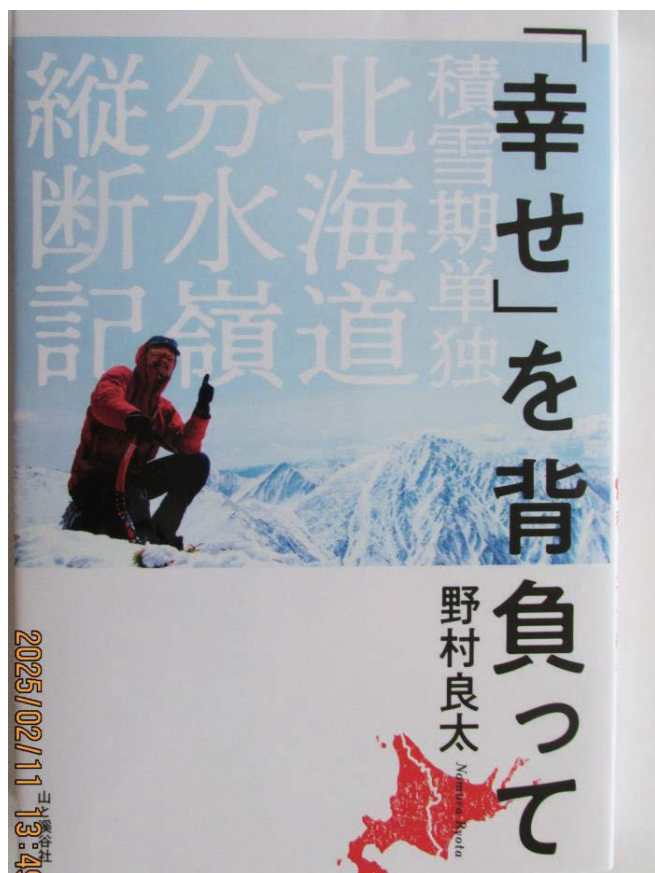
この本が 2024 年 7 月に芥川賞を受賞し”バリ山行“という言葉が、一般に知られるようになる前に、私の所属している”山の会“の中で、私の「背振の藪漕

ぎ山行」計画は勝手に「バリハイ (バリエーションハイキング)」と呼ばれていた。そんな背景が在り、”バリ山行“ならこっちが先だぞ・・・と言う気持ちも在って手に取った本。

読み始めて最初は全然面白くなかった。しかしほとんど後半、山の素人がバリ山行をしている人に連れられ、反発し葛藤する内面に抗いながら、何時か自分もその世界に没入してしまう主人公の内面の変化が記される辺りから俄然面白くなる。私も人に知られていない場所、一人を好むところなど、確かに気持ちに共通するところがある。とにかく「誰も来ない」という山行に憧れる。しかし私の場合、毎回一応の行き先・行く目的は持っている。この本の主人公にバリ山行を教える人の「何もない」を求めているのとはちょっと違う。しかし「錯綜する樹林に飲まれ、汗みどろになってもうわけがわからない、現在地を確かめるのもわずらわしい」・・・と言う感覚、すごく良く分かる。「もはや私は何物でもない、社会の一切から取り残され、あるいは無用とされて、しかしその中に充溢を感じるのとはなぜだろう・・・」という気持ちも。ただ一つ、最後に主人公がバリ山行に連れて行ってくれた先輩に発したバリ山行中の罵詈雑言を一言謝りたいと思っているのに、会えないまま終わらせてしまう・・・。その時先輩はどういう反応を示したか・・・を書いてほしかった。でもこれは読後、余韻を残し想像させるためだったのかもしれない。それにしても本の著者は”藪漕ぎ“の相当な経験者なのか。でなければ、微に入り細に渡っての藪漕ぎ (バリ山行) の詳細は書けないと思う。私のやり方とは少し違うが。



「幸せ」を背負って
積雪期単独北海道分水嶺縦断記
野村良太 著 (山と溪谷社)



この本を手にとったのは私の青春を燃やした北海道の山々、北部の低山からあの峻険な日高の峰々が舞台の記録だから（私は小樽の生まれで北海道の山で鍛えられた昭和の山屋）著者はこの記録で「第 27 回植村直己冒険賞」等を受賞している。

本は大きく 2 部に分かれていて、第 1 部は大阪生まれの生い立ちから北海道大学 WV 部で山を知り、それが分水嶺の計画にそして山の世界で生きていくと決めるまでの心の記録。第 2 部は北海道の北端（宗谷岬）から南端（襟裳岬）へ分水嶺 670 キロ 62 日間の山行の記録。地図の裏に記した記録を原文のまま綴ったもの。もちろん私は分水嶺 670 キロ、著者が記している 64 峰、そのほんの一部に登っているにすぎませんが、感覚的に想像できる北海道の山だけに、読んでいて思いつく事、書きたい事次から次へと出てくるのです。その中で特に強く心に残った事を記してみたいと思います。記録の白眉は“日高山脈”の 18 日間。私は日高には一人で入った事はないし冬の経験も僅かですが、でもこの本の記録のなかで一番共感するのは、スタートの標高 20～400m の宗谷丘陵の旅。地吹雪の吹き荒れるなんの目印もないただただ単調な雪原を、

黙々とスキーを滑らせる姿は、九州の人たちには想像できないと思う。この雪原の旅はそのほんの一部ですが私も歩いたことがあるし、それだけに日高以上に心に迫るものがある。GW に北海道の屋根大雪山の北端、「武利・武華岳から比麻良山（ヒマラヤマ、誰がどういいう思いで付けたのか、語源は何なのか、美しい山名です）」へ歩いた（この時はニセイカウシュッペ山へ抜けた）のも懐かしい思い出。この単独行のなかで実際は数々のアクシデントでサポートに頼らざるを得ない事も起こるのだが、それでも気持ちの中でノンサポートに拘る著者の気持ちもよくわかる。そして日高山脈、ここでの単独行の恐ろしさ、不安で押しつぶされそうになる気持ちも同じ。その中でも本のタイトル「幸せ」を常に背に負って・・・という気持ちを忘れない。この全人未踏の挑戦の末、著者のつかんだ「幸せ」とは何だったのか、正直私には漠然としていてよく整理できないが、それは読んだ人それぞれに委ねられるものでしょう。最後の最後、楽古岳で降りたのは残念。その先にもトヨニ岳・野塚岳・オムシャヌプリと 1200m～1500m 級の山々が連なり、襟裳岬へと落ち込んでいる。これはぜひ歩いてもらいたかった。それで初めて分水嶺完全縦断となるのでは・・・と思うのだが、これはもう出来なくなった、否試みてもない者の負け惜しみか。とにかく北海道の山には大自然と自分しかいない世界が広がる。それぞれではあろうが、私の山登りは今もそれを引きずっているのを改めてこの本で知らされる。

尚この記録は 2022 年年末、すべて自撮りのまま NHK で「白銀の大縦走・北海道分水嶺ルート 670 キロ」というタイトルで地上波全国放映されています。見たことのある人も多いでしょう

2025 年 今読んでいる山の本

地図なき山 日高山脈 4 9 日漂行
角幡唯介 著 (新潮社)

2024 年に読んだ山の本で紹介している「極夜行」に続く冒険登山行。確かに原始の姿をそのままとどめる日高山脈。そこに地図を持たずに分け入ったらどうなるのか。現在地を示しその先に何があるかを予測させてくれる地図、それを手放すということは、自己を「社会システム」の外に放り出すこと。冒険の本ですが「生きる」という意味も問う本。読み終わるにはもう少し時間掛りそうです。

ミニヤコンカ山麓のチベット娘・ ヤンツォと一枚の写真

No. 9826 渡部秀樹

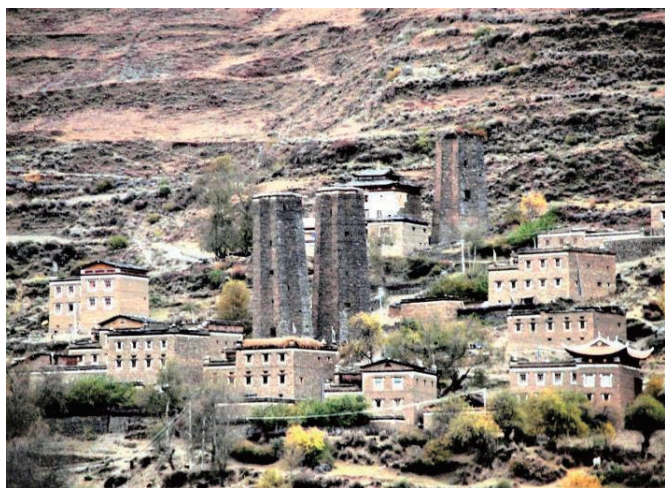


その谷を初めて訪れたのは2008年秋、四川大地震調査の一環であった。四川省カンゼ・チベット族自治州に位置する大雪山脈の最高峰であり、横断山脈の最高峰でもあるミニヤコンカ（7,556m）を展望できる場所を求めて、横断山脈を横断しながらミニヤコンカの西のユーロンシの谷に入って行った。



▲ルワさん宅でバター茶を

ルワさんの孫娘のザシ・ヤンツォは当時16、17歳くらいで、村一番の美人娘といわれていた。ヤンツォは人懐っこく明るい娘で、私もちょうど同じ年頃の娘を持つ身ということもあり、すぐに仲良くなった。ルワさんはヤンツォをととても可愛がっており、年頃の彼女がいつか嫁にとられるのかと考えると辛いようで、ヤク300頭以上もらわないと絶対に嫁には出さないと断っていた。



▲ルワさんの孫娘ヤンツォ

2010年4月に今度はミニヤコンカ山群の山座同定を目的に再度、サムジュンを訪れ、またルワさん宅にお世話になった。ヤンツォの姿がなかったので聞くと、昨年谷を出てジャグンバ村に嫁に行ったという。ヤクを何頭もらったのかと尋ねると、あまり金持ちの家ではなかったと苦笑していた。明るいヤンツォのいない家は火が消えた様で、なんだかさびしい感じだった。



▲子梅峠から横断山脈最高峰ミニヤコンカ（7,556m）

この帰国後機会あって、この時の山座同定の写真などを横断山脈研究会にメールで紹介した。すると会員の京大OBのSさんから返信があり、1995年にサムジュンを訪ねたときの写真が送られてきた。



▲Sさんより届いた1995年のサムジュンでの写真

この写真を見た時、左端の少女は年頃から考えて、ヤンツォではないかと思ったのだ。また、いつかこのサムジュン村付近の夏の高山植物も調査したいと思っていたので、その旨を研究会メールで知らせたところ、

もし再訪するなら村人に写真を届けてほしいと、会員から続々と写真が送られてきた。多くが1990年代年のもので、コンガ寺で修業していた王徳生氏や、ケサル王伝説のイーゼン（口伝弁師）、ペンツォ・ワンドイ氏の写真も含まれていた。

そして2010年7月、偶然、早稲田大学山岳部からこの山域の調査の依頼があって、登山協会と折衝しなければならぬこともあり急遽訪問を計画した。すると、松本徂夫先生ら日本山岳会福岡支部有志を中心に高山植物調査を行いたいとの要望もあり、願ってもない福岡隊でのサムジュン再々訪問となった。



預かった村人の写真はルワさんにまとめて託そうと、早速、家を訪ねたところ、なんと赤ん坊を背負ったヤンツォがいるではないか。「ペンバが来た！」とヤンツォが喜んでくれた。「ヤンツォ、もう出戻ったのか？」と聞くとそうではなかった。すばらしい偶然が待っていたのだ。



▲赤ちゃんを背負ったヤンツォ

翌日からシャバーズという祭りがあるとヤンツォをはじめ、村人たちが皆興奮しているのだ。離散し村を

離れた村人も全員帰省してくるのだという。かつて日本の登山隊の多くは村の名士のスランさんにお世話になっていたが、この一家は康定に移転しておりもう会えないだろうと思っていたが、祭りで帰省していた。それだけではない、ケサル王伝説の弁師ペンツォ・ワンドイ氏も、コンガ寺で修業した王徳生氏もいるではないか。この祭は村のかつての賑わいを取り戻すかのような信じられない状況となり、持参した写真を全員に直接渡すことができた。写真が撮影された当時はまだスマホもない時代で、村でカメラを持っている者はほとんどなく写真は貴重であったので、この写真が村祭りに花を添えることになったのだ。



祭りは放牧地に各家族がテントを張って、泊まりがけで宴会が行われる。なんとかつての村の名士スランさんとルワさんは兄弟であり一番大きなテントを張っていた。写真を持参したので、各テントに招待され酒のシャブダ！（乾杯！）攻めにあった。なんだかこちらまで村に帰省したかのような錯覚となり、なつかしい気分になった。私の田舎も、祭りや盆、正月は親戚が集まり酒を飲んでにぎやかだったことを思い出した。



古い写真の中の少女は、やっぱりヤンツォだったのである。この偶然の出来事は不思議な気分であった。この縁を結んだのは、やはりこの写真と一緒に写っているこの地を偶然訪れた先輩たちだったのだと思う。

Sさんから送られた写真には、以下の手紙が添えられていた。

「1995年4月ミニヤコンカへ行きました。この隊をきっかけに、この横断山脈研究会が発足しました。しかし、その時のメンバーであり、研究会の創設メンバーであった仲間は皆既に他界されました。サムジュンに泊まった日に、近くの河原で村の可愛い子供達と撮った写真をお送りします。後列左から、故Iさん、故Sさん、故Mさんです。最近、ラダックやザンスカールのゴンパを訪問するたびに、この写真を持参して、本堂で般若心経を唱えさせていただいて旧友の御冥福をお祈りしています。S 拝」



チベット娘ヤンツォが時を越え、結んだ不思議な縁であった。写真は離散したみんなを引き寄せたかのように、それぞれ直接渡すことができ、不思議な気持ちと、何だか切ない気持ちも残った。

ヤンツォはすっかり大人になり、たくましく美しい母になっていた。



▲2010年の福岡隊メンバーとヤンツォらサムジュン村民

令和6年度支部活動報告

令和6年度福岡支部通常総会報告

◇日時：2024年5月26日（日）14時開会
 ◇場所：福岡市中央市民センター 視聴覚室
 会員数：50名 総会出席：13名 委任状：23名
 合計：36名

各議案は審議され承認された。

総会後に記念講演会として、映像報告「映像が捉えた山と人」尾登憲治氏（映像作家）を開催した。

低山と居酒屋シリーズ

支部山行として糸島地域のマイナーな低山を選シリーズとして5回実施した。

※詳しくは別項、支部山行実施報告を参照。

夏山フェスタ in 福岡 2024（第7回）開催

◇日時：2024年6月22日（土）・23日（日）
 ◇場所：電気ビル共創館 4F みらいホール
 講演：クライマー山野井泰史氏、
 トレイルランナー石川弘樹氏、登山 YouTuber とよ氏
 などのセミナーを実施。
 また、福岡支部は「九州の岳レジェンド達」海外登山
 の歴史など、として講演した。
 来場者数：22日約1,200人、23日約2,800人
 合計：約4,000人

令和7年度の支部活動計画

令和7年度福岡支部通常総会予定

◇日時：2025年5月18日（日）14時開会
 ◇場所：福岡市中央市民センター 視聴覚室

夏山フェスタ in 福岡 2025（第8回）開催予定

◇日時：2025年6月28日（土）・29日（日）
 ◇場所：電気ビル共創館 4F みらいホール

その他、支部山行として近郊低山シリーズなどを計画

日本山岳会九州5支部懇談会「熊本」予定

◇期日：2025年9月20日（土）～21日（日）
 ◇場所：宿泊・・・阿蘇プラザホテル（阿蘇市内牧）
 会議・・・草原保全センター（阿蘇市内牧）予定
 主要テーマ 「九州各支部の古道調査発表」

Eメールアドレスをお知らせください。

お知らせなどの即時性、利便性を考え電子メールでの
 情報発信を行います。まだEメールアドレスをお知らせ
 いただいていない方、変更された方は、下記福岡支
 部までメールにてお知らせください。

（社）日本山岳会福岡支部事務局
 JAC 福岡支部 e-mail: fko@jac.or.jp
 TEL：092-715-1557 FAX：090-715-0826

《編集後記》

支部報にかかる経費を少しでも削減するため、今回から編集、デザインを外部委託することを止め、手前で入力して制作してみました。不慣れなこともあり以前のように自由にデザインすることができず、シンプルなレイアウトになっています。読みづらい点もあるかと思いますがご容赦ください。

今年度は「低山と居酒屋」シリーズと題して糸島地区の低山で支部山行を実施しました。年々参加者が減少傾向にありますが和気あいあいと楽しみました。今後も継続する予定ですので是非ご参加ください。

今回は松原稔氏、柴田佳久氏、渡部秀樹氏から貴重な寄稿をいただき、写真のスペースも多くとって掲載することができました。柴田氏からは「槍・穂高連峰の山小屋」として槍・穂高連峰の山小屋について実体験を書いていただきました。歴史ある有名な山小屋ばかりでとても参考になります。松原氏からは「2024年に読んだ山」として6冊の読後感想を寄稿いただきました。氏が読書家であることが拝察できます。渡部氏からはチベットでのエッセイ風体験記談が寄せられました。

年に一度の支部報発行ですが、今回も充実した誌面となり発行することができました。今後とも皆様の積極的な投稿をお願いいたします。（KK、HW）

■発行者：福岡支部事務局・支部長代行 渡部秀樹 ■編集者：倉智清司、渡部秀樹 ■発行日：2025年（令和7年）3月31日
 ■発行所：公益社団法人 日本山岳会福岡支部 〒811-1302 福岡市南区井尻 5-6-14-201 渡部秀樹方